TADOKU JUNIOR　せかいのなぜなに神話　★★★☆☆ ふつう　603語

The Story of the First Grasshopper

はじめてのバッタのおはなし

Florence Holbrook（1902年の本）　原文そのまま　朗読：Patty H

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　朝の女神アウロラは、美しいかりゅうどティトノスと出会い、いっしょにくらしはじめます。ティトノスがけっして死なないように、と神さまにねがいますが……。



In a country that is far away there once lived a young man called Tithonus. He was strong and beautiful. Light of heart and light of foot, he hunted the deer or danced and sang the livelong day. Every one who saw him loved him, but the one that loved him most was a goddess named Aurora.

Every goddess had her own work, but the work of Aurora was most beautiful of all, for she was the goddess of the morning. It was she who went out to meet the sun and to light up his pathway. She watched over the flowers, and whenever they saw her coming, their colors grew brighter. She loved everything beautiful, and that is why she loved Tithonus.

"Many a year have I roamed through this country," she said to herself, "but never have I seen such bright blue eyes as those. O fairest of youths," she cried,

"who are you? Some name should be yours that sounds like the wind in the pine trees, or like the song of a bird among the first blossoms."

The young man fell upon his knees before her. "I know well," said he, "that you are no maiden of the earth. You are a goddess come down to us from the skies. I am but a hunter, and I roam through the forest looking for deer."

"Come with me, fairest of hunters," said Aurora. "Come with me to the home of my father. You shall live among my brothers and hunt with them, or go with me at the first brightness of the morning to carry light and gladness to the flowers."

So it was that Tithonus went away from his own country and his own home to live in the home of Aurora.

For a long time they were happy together, but one day Aurora said, "Tithonus, I am a goddess, and so I am immortal, but some day death will bear you away from me. I will ask the father of the gods that you too may be immortal."

Then Aurora went to the king of the gods and begged that he would make Tithonus immortal.

"Sometimes people are not pleased even when I have given them what they ask," replied the king, "so think well before you speak."

"I have only one wish," said Aurora, "and it is that Tithonus, the fairest of youths, shall be immortal."

"You have your wish," said the king of the gods, and again Tithonus and Aurora roamed happily together through forest and field.

One day Tithonus asked, "My Aurora, why is it that I cannot look straight into your eyes as once I did?" Another day he said, "My Aurora, why is it that I cannot put my hand in yours as once I did?"

Then the goddess wept sorrowfully. "The king of the gods gave me what I asked for," she wailed, "and I begged that you should be immortal. I did not remember

to ask that you should be always young."

Everyday Tithonus grew older and smaller. "I am no longer happy in your father's home," he said, "with your brothers who are as beautiful and as strong as I was when I first saw you. Let me go back to my own country. Let me be a bird or an insect and live in the fields where we first roamed together. Let me go, dearest goddess."

"You shall do as you will," replied Aurora sadly. "You shall be a grasshopper, and whenever I hear the grasshopper's clear, merry song, I shall remember the happy days when we were together."

遠い国に、むかし、ティトノスというわかものがすんでいました。ティトノスは強くて美しいわかものでした。心もかるく足どりもかるく、1日じゅうシカをかったり、おどったり歌ったりしてすごしていました。ティトノスを見た人はみんなティトノスがすきになりましたが、いちばんすきになったのは、アウロラという女神でした。

女神たちにはそれぞれ自分の仕事がありましたが、アウロラの仕事はいちばん美しいものでした。アウロラは朝の女神だったのです。お日さまをむかえに出て、お日さまの通り道をてらすのがアウロラでした。アウロラは花たちを見守っていて、花たちはアウロラがやってくるのを見ると、いつも色がいっそう明るくなりました。アウロラは美しいものが何でも大すきで、だからティトノスのことも大すきになったのです。

「何年もこの国を歩き回ってきたけれど」とアウロラはひとりごとを言いました。「あんなに明るい青い目は見たことがないわ。いちばん美しいわかものよ」とアウロラはよびかけました。「あなたはだれ？あなたには、マツの林をふく風のような、さいしょにさいた花の中で歌う鳥の声のような、そんなひびきの名前がふさわしいわ。」

わかものはアウロラの前にひざまずきました。「よくわかります」とティトノスは言いました。「あなたは地上のむすめではありませんね。空からわたしたちのところへおりてきた女神さまです。わたしはただのかりゅうどで、シカをさがして森を歩き回っているのです。」

「いっしょにいらっしゃい、いちばん美しいかりゅうどさん」とアウロラは言いました。「わたしの父の家へいっしょに行きましょう。わたしの兄弟たちといっしょにくらして、かりをしてもいいし、朝いちばんの明るさといっしょに、わたしと花たちに光とよろこびをとどけに行ってもいいわ。」

わたしの兄弟たちといっしょにくらして、かれらとかりをしてもいいし、朝いちばんの光とともに、わたしといっしょに花たちへ光とよろこびをとどけに行ってもいいわ。」

長いあいだ、ふたりはいっしょにしあわせにくらしましたが、ある日アウロラが言いました。「ティトノス、わたしは女神だから、けっして死ぬことはないわ。でも、あなたはいつか死んで、わたしのところからいなくなってしまう。神さまたちのお父さまにおねがいして、あなたもけっして死なないようにしてもらうわ。」

そしてアウロラは神さまたちの王さまのところへ行って、ティトノスをけっして死なないようにしてくださいとたのみました。

「ほしいものをあたえてやっても、よろこばないことがあるものだよ」と王さまは答えました。「だから、よく考えてから言いなさい。」

「ねがいはたった1つです」とアウロラは言いました。「いちばん美しいわかもののティトノスが、けっして死なないようにしてください。」

「ねがいをかなえよう」と神さまたちの王さまは言いました。そしてまた、ティトノスとアウロラはしあわせそうに森や野原をいっしょに歩き回りました。

ある日、ティトノスはききました。「アウロラ、どうしてぼくは、前のようにきみの目をまっすぐ見ることができないんだろう？」またある日、ティトノスは言いました。「アウロラ、どうしてぼくは、前のようにきみと手をつなぐことができないんだろう？」

すると女神はかなしそうになみだを流しました。「神さまたちの王さまは、わたしがおねがいしたものをくださったの」とアウロラはなきながら言いました。「わたしは、あなたがけっして死なないようにとおねがいしたわ。でも、あなたがいつまでもわかいままでいられるようにとおねがいするのを、わすれていたの。」

毎日毎日、ティトノスは年をとって、小さくなっていきました。「もう、きみのお父さんの家にいてもしあわせじゃないんだ」とティトノスは言いました。「きみの兄弟たちは、ぼくがはじめてきみに会ったころのように、美しくて強いからね。ぼくを自分の国へ帰らせておくれ。鳥か虫になって、ふたりがはじめていっしょに歩き回った野原でくらさせておくれ。行かせておくれ、大すきな女神さま。」

「あなたののぞむようにしましょう」とアウロラはかなしそうに答えました。「あなたはバッタになるのです。そしてわたしは、バッタのすんだ楽しい歌を聞くたびに、ふたりがいっしょだったしあわせな日々を思い出すことでしょう。」

たんご と クイズ はじめてのバッタのおはなし

deer シカ	goddess 女神	sun お日さま
flowers 花	eyes 目	hunter かりゅうど
insect 虫	grasshopper バッタ	

Q1 アウロラは何の女神？

① 夜の女神　② 朝の女神　③ 海の女神

Q2 アウロラがおねがいするのをわすれていたことは？

① ずっとお金持ちでいること　② ずっと強い力をもつこと　③ ずっとわかいままでいること

Q3 ティトノスは、さいごに何になった？

① バッタ　② 小鳥　③ チョウ

こたえ

Q1 ② アウロラは朝の女神です。お日さまをむかえに出て、通り道をてらすのが仕事でした。

Q2 ③ 死なないようにとはおねがいしたのに、いつまでもわかいままでいられるように、とおねがいするのをわすれていたのです。

Q3 ① ティトノスはバッタになりました。アウロラはバッタの歌を聞くたびに、しあわせな日々を思い出すのです。

原田英語の多読ベストジュニア
本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。
haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典 英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #22420（Florence Holbrook、1902年）。パブリックドメイン。
挿絵：この本には挿絵がないため、場面をイメージして AI（Codex）で描いた絵です。
朗読（Web版）：Patty H（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは 3 重チェック。人の目でも順次確認しています。